

この講演は山口日米協会第3回総会記念講演（2013年5月26日開催）の概要をまとめたものです。

講師の林裕子氏の略歴は以下の通りです。

東京大学卒業後、日本 IBM 株式会社でシステム開発。林芳正氏と結婚後、マサチューセッツ工科大学 Center for Advanced Engineering Study の研究員を経て、1994年マサチューセッツ工科大学 Technology and Policy Program にて理学修士取得。東京大学大学院工学系研究科にて博士(学術)取得。その間、衆議院議員林義郎の補佐、参議院議員林芳正の補佐等で現在に至る。現在 山口大学 大学院技術経営研究科准教授(特命)、一般社団法人日本 MOT 振興協会「女性の活躍舞台づくり」委員会委員、政策研究大学院大学 特任研究員、社会活動として、スペシャルオリンピックス日本・山口会長、一般社団法人 3-11 震災孤児遺児文化・スポーツ支援機構常任理事、カナダ友好協会副会長、NPO 法人 JACFA 理事、山口県レディースバドミントン連盟会長 等



『アメリカのダイバーシティ』 講師 林 裕子氏

マサチューセッツ工科大学 (MIT)

本日は、「アメリカのダイバーシティ」と題し、私がアメリカで経験しましたことをお話しさせていただきます。

私は、もともとバックグラウンドが技術関係で、科学技術と政策に関するプログラムを探しておりましたら、マサチューセッツ工科大学 (MIT) にテクノロジー・アンド・ポリシープログラムという修士課程のプログラムがありました。私の科学技術系の専門を生かせ、また、夫の仕事にも関わる政策立案などに携われるということで、ボストンに単位を取りにまいりました。色々な事情で、ボストンには3回まいりました。

MIT の最初の印象は「とても理系っぽい学校」でした。今では当たり前のことなのですが、1991年頃、最初のレポートは『パソコン』で提出というので、日本では手書きで提出していたものですから、すぐに大学の生協で一体型になったマックを買いました。

まわりを見回すと、MIT は中国系、インド系の人が多く、私もアジア人として全く違和感がありませんでした。時々間違えられて「クーニャン」と声をかけられるくらい中国の方が多く、そういった多人種に恵まれた学校でした。

本日は「ダイバーシティ」についての話なので、その辺りから少しご紹介させていただきます。日本はまだまだダイバーシティに関する免疫性が少ないのかなあというのが印象です。当時はバブルということもあり、企業が多くを海外に出していましたが、今は内向き志向で、学生もあまり留学しない事が一つの問題になっています。しかし、こうやって色々な人種の中で議論を戦わせたりする経験が、これから日本人に必要なではない

かと思っており、そういった意味でも、日本は免疫が少ないということが、私を感じている問題点です。日本は国内の市場が非常に大きいので、国内で売れるだけで企業も儲かる、ということもありますが、日本がどんどん海外に進出し、標準を日本が作るというような時代が来ることを願っております。ダイバーシティを経験することによって、このようなことを解決していけたらと思います。

世界の半分は女性です

もう一つは、ダイバーシティというのは、いろいろな人種の中でやっていく環境を整えることなのですが、世界の人口の半分は女性ですから、女性が本来なら半分いないとおかしい、もっと頑張っていけないといけな、っていうのを感じております。それで、ワールド・エコノミック・フォーラム（「ダボス会議」といわれるところ）が、毎年出している報告書に、ジェンダー・ギャップといって、社会的に女性と男性がどのくらい差があるかを示した順位があります。経済参加と機会の提供では、女性の雇用がどのくらいあるか、女性の取締役がどのくらいいるかなど、いろいろな指標があります。その順位が135ヶ国中、日本は102位、アメリカは8位です。日本はまだまだ女性が経済活動に参加していないのが非常に大きな問題で、日本は、課長や部長などマネジメントにいる女性の平均は大体5%から7%ですが、日本企業でも海外に進出している企業では、マネジメントの地位にある女性は25%くらいです。同じ会社の中で女性が、海外支店ではそのくらい活躍しているけれども、日本の中では数少ないというのは、会社自体に問題があるのではなく、自国に問題があるということも考えられます。もうひとつは教育達成度です。私たちは、日本って素晴らしい、みんな高等教育も受けていると思うのですが、実はそうでもなく、日本の高等教育の進学率は世界で81位。実は今、先進国では、男性より女性の方が進学率が高いのです。例えば、韓国の高等教育に進んでいる割合は、100%を超えています。それは何故かというと、分母が高校を卒業した人で分子が大学に入った人だからです。韓国は、社会に出た人が大学に戻ってきたり、大学に何かの理由で行けなかった人がお年を召してから大学に戻ってきたりする事例があります。もちろんアメリカもそうで、MITの大学院は社会から戻ってきた人が沢山いました。

女性の政治参加では、女性議員ブームは出てきては消えてきては消えという一過性になっておりまして、アメリカも実は決して割合は高くない。指標は、国会議員や地方議員の比率とか、大臣の数とか、女性も今やすごく沢山の方たちが世界で大統領や、首相、元首になっています。まだまだ日本の政治の順位は、後ろから数えたほうが早いくらいで、アメリカでもなかなかヒラリーさんも大統領になれず、アメリカもまだそんなに進んでいる国ではないともいえます。韓国は、比例代表には女性を半分。ヨーロッパの国は、クォータ（割り当て）制をやっている国も多く、フランスも各政党に必ず女性候補を何割と義務づけております。ノルウェーは、9個の大きな政党がある中で7つの政党の党首が女性で、公的な委員会には必ず女性が4割から6割、女性が9割でも男性が9割でもいけない、両

方の性がきちんと入ってないといけないというクオータ制をやっています。ところが、アメリカはそういったことが「自由の国」ということで、なかなかクオータ制を導入せず、自由に競争し、今の状態になっています。環境を整えるといっても、形式的には整っていても、そこに行くまで「鶏と卵」ではないですが、役割を与えられなかったら経験ができないから、ポジションを見つけられないなどの問題があります。

科学の世界のダイバーシティー

少し専門的な話になりますが、多様性と技術、多様性とイノベーションということについてお話しします。

もともとはテクノロジー・ブッシュとあって、先ず技術があって、その技術から何かを創造していた時代。ところが、今はデマンド・ブルと言って、こういうものをやりたいが、どういう技術が必要かというのを選んでいく時代になってきました。昔は技術の数も少なく、シンプルでしたが、今は複雑系にかわりました。政策に関しても、昔は原子力を発達させるためにはどうするべきか、航空機を作るためにはどうしたらいいか、月に行くためにはどうしたらいいか、ロケットの技術を開発するにはどうしたらいいか、という「科学のための政策」という方法取られていました。その時代から、今は「政策のための科学」という時代に代わっています。長寿社会を非常に豊かにするにはどういった技術が必要なのか、いろいろな社会問題、環境問題を解決するためにはどういう技術を使用していかなければいけないかという図式に変わっております。

もう一つは、技術突破型から技術融合型ということです。技術突破型というのは、エレクトロニクスとか半導体とかを作るのにもいろいろな技術を開発し、一つの分野で専門家たちが集まって、そしてこの技術を発展させるには、どうしたらいいか、知識、研究を重ねて技術を発展させていくということです。戦中戦後の技術の発展の仕方がこの技術突破型ですが、今は、ロボットとエレクトロニクスをまぜてロボティクスを作るなど、技術融合型に変わっています。

生物学もそうです。昔は小さな研究室で、みんなが試験管でいろいろな実験をしていたのが、今はバイオテクノロジーやアイピーエス細胞等バイオの分野が、大学で一番研究費を取っています。何が iPS 細胞を発展させる要素になったかということ、コンピュータで遺伝子の解析をして、その結果を大きなデータベースで探り、再生可能な遺伝子を見つけ出という方法がとられていて、今やそのバイオテクノロジーというのは、生物学だけではなく、生物学・化学・物理学・医学・情報工学など、そういったもの全てを集めたものがバイオの世界です。

限られた科学者のコミュニティの中で研究が進められていた時代から、技術の発展というのは、社会全体の発展に繋がるっていう、そういった意味でも専門的な分野から学際的分野、同種から異種、いろいろな多様性のある人達と交わって、技術の開発を進めていくような形態に代わってきています。

私は、アメリカの中でいろいろな多様性を経験させていただきました。宇宙工学、バイオテクノロジー、建築などの学部、いろいろなバックグラウンドを持った人が、インターデパートメントプログラム（学部横断型授業）で、科学政策を作るという単位を取るために来られていました。専門分野が全く違う人が集まり、科学政策に関わっていくというのは、非常に面白かったです。

そういったプログラムの中で、実戦でやっているところがすごく、大学の周りに、新しい会社、特にバイオの関係の会社を卒業生が起こしています。自分よりも生徒の方がずっとお金持ちで、生徒の方がいい家に住んでいて、そういう環境で教えるのも悲しいな、と嘆いている先生がおりました。実は MIT 卒業生の初任給は全米一高いそうです。それは、自分が稼いでいる人も多いので、初任給といっても、会社から給料をもらっているのではなく、自分で稼いでいるので1番になっている、そういう大学です。

大学生もいろいろ

大学生の単位の取り方もいろいろです。ハーバードだったらロースクールと技術系、ロースクールとビジネススクールなど、バイオテクノロジー技術を学びながらビジネスの単位を一緒に取る、ということもできるのです。日本みたいに毎日授業があるわけではなく、日に2コマあれば、ちょっと多いかな、という感じで、その代わりにすごく宿題があります。会社の派遣で来ていた私の友達が、間違っって日本みたいに満杯に申請し、1年で卒業出来て、会社から2年の休暇をもらっていたので、もう1年違う学校に入り直しました。

私のクラスは20人位しかいなかったのですが、中国人、フランス人、インド人、中国系のアメリカ人など、年齢もいろいろでした。社会に出てから戻ってきた人や、すごく頭が良く18歳位で飛び級で修士課程、20歳位でハーバードの物理学を卒業してからここに来ましたとか、同じ年でも博士課程に行ってる人とか、年齢幅もすごく幅がありました。夫（林氏）が行ってたハーバード大学ケネディスクールでは、アジア人も多く、各国で将来政治の道に就くだろう高級官僚達が大変多くきていて、途中でブラジルの大統領に任命されて帰国された人もおられました。太平洋の島で何の仕事をしてたのですか、とお聞きしたら、「プレジデントです」って言われたので、ある会社のプレジデントかと思ったら、「大統領」という人がおられました。むしろ、先生がコーディネーターで、そういう人たちからいろんなことを引き出す役割というか、そういう何か楽しい授業でした。

アメリカでは、いろいろな経験を通じて“ダイバーシティ“ということを感じさせられましたが、本当にこういった国々の方とどういふふうに関わって、お互いの違いを認めあいながら、仕事をしていくという事も大事だし、自分たちがどんな人の下で働くか、どういう人の上に立つか、分からないということで、人種や性の多様性も含め、これから関わっていかねばならない、というのを感じています。

とりとめのないお話しになりましたが、このあたりで今日のお話しとさせていただきます。(文責・事務局)